

カンキツ新品種‘肥の豊’の特性

坂西 英・藤田賢輔・磯部 暁・満田 実¹
(熊本農業研究センター果樹研究所・¹ 熊本県立農業大学校)

Masaru Sakanishi, Kensuke Fujita, Akira Isobe and Minoru Mituta :
Characteristics of New Citrus Cultivar "Hinoyutaka"

‘不知火’は、近年、急速に栽培面積が拡大し中晩生カンキツの主力品種となりつつあるが、導入年数の経過とともに樹勢が低下しやすく収量が少ないこと、高酸果実の割合が高いことが問題となっている。

そこで、本研究所では、樹勢が強く、食味が良好な‘不知火’珠心胚実生種の育成を目標に品種改良を行い、‘肥の豊’を選抜したので、特性の概要を報告する。

1. 育成経過

1989年に果樹研究所植栽の‘不知火’に‘マーコット’の花粉を交配し、1990年6月に胚分離を行い149個体を養成した。特性検定のため、1992年に実生個体108個体、1993年に41個体を3反復により温州ミカン‘白川’を中間台として高接ぎし、棚仕立てによる誘引下垂法を行った。果実特性検定については、1995年から1997年にかけて12月下旬に採取し、3日程度予措後、常温貯蔵した果実について実施し、その結果、品質良好な‘肥の豊’を選抜した。本品種は、2000年3月に品種登録を申請し、同年10月に品種登録出願が公表された。

2. 特性の概要

‘肥の豊’は樹勢が強く、特に幼木や高接ぎ当初は生育が旺盛でトゲの発生が多い。枝梢の長さはやや長く、発生本数はやや密である。葉の形態は卵形で大きさは‘不知火’より大きい傾向にある(第1表)。

第1表 ‘肥の豊’の樹の生育と枝葉形態

品種名	主幹周 (cm)	樹容積 (m ³)	春枝 (cm)	夏枝 (cm)	葉身長 (mm)	葉幅 (mm)	葉柄長 (mm)	葉面積 (cm ²)
肥の豊	11.8	1.22	15.1	34.5	75.3	33.5	18.5	17.2
不知火	11.1	0.91	12.8	21.1	68.5	31.1	15.0	13.9

注) カラタチ台‘肥の豊’2年生を1997年植付けし、1999年7月調査。葉の形体調査は、春葉の計測。

果実の大きさは270~300gで‘不知火’と同程度で果こう部にカラーを有する果実の割合がやや高い。果面はやや滑らかである。果実着色は‘不知火’と同時期かやや早く、10月中旬から始まり12月上中旬には完全着色となる。

第2表 ‘肥の豊’の果実形態(1995~1997年の平均値)

品種名	平均果重 (g)	横径 (cm)	縦径 (cm)	果形指数 (%)	カラー ^a 高さ	果面 ^b 粗滑	着色 歩合
肥の豊	294.1	8.17	8.18	99.8	3.82	4.00	9.00
不知火	305.6	8.71	8.13	107.4	2.83	3.40	8.95

注) a) カラーの高さの基準は低(1)、中(3)、高(5)の5段階で判定。
b) 果面の基準は粗(1)、中(3)、滑(5)の5段階で判定。

果実品質は、12月下旬に収穫、1月中旬の分析で屈折計示度12.5~14.0、クエン酸含量1.2~1.4g/100mlとなり、‘不知火’に比べ糖度は同程度、クエン酸含量が0.2g/100ml程度少ない(第3表)。

第3表 ‘肥の豊’の果汁成分

品種名	1995年 ^a		1996年 ^b		1997年 ^c	
	屈折計 示度	酸含量 (g/100ml)	屈折計 示度	酸含量 (g/100ml)	屈折計 示度	酸含量 (g/100ml)
肥の豊	14.9	1.28	13.4	1.20	14.5	0.96
不知火	15.0	1.49	13.8	1.43	14.6	1.16

注) a) 採取日1995年12月20,21日,1996年1月16日分析。

b) 採取日1996年12月19,20日,1997年1月29日分析。

c) 採取日1997年12月19日,1998年2月13日分析。

以上のことから、本品種は露地栽培において1月中下旬の収穫が可能であり、‘不知火’の樹勢低下や減酸不良園の更新品種として期待できる。



写真1 カンキツ新品種‘肥の豊’の結果状況

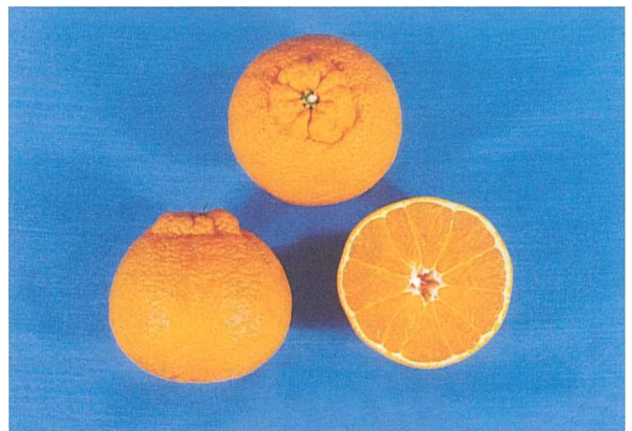


写真2 カンキツ新品種‘肥の豊’の果実